

日蓮大聖人御書全集

ぜんむいさんぞうしょう

善無畏三蔵抄

新版
1182
ゝ
1195

ぜんむいさんぞうしよう

善無畏三蔵抄

ぶんえい

ねん

文永7年('70)

さい

ぎじょうぼう

じょうけんぼう

49歳

義浄房・浄顕房

ほけきよう

いちだいしようぎよう

かんじん

はちまんほうぞう

よ

法華経は一代聖教の肝心、八万法蔵の依りどころなり。

だいにちきよう

けこんぎよう

はんにやきよう

じんみつきようとう

もろもろ

けんみつ

しよきよう

大日経・華嚴経・般若経・深密経等の諸の顕密の諸経

しんたん

がつし

りゆうぐう

てんじよう

じつぼうせかい

こくど

しよぶつ

せつきよう

は、震旦・月氏・竜宮・天上・十方世界の国土の諸仏の説教、

ごうじゃじんじゆ

たいかい

すずり

みず

さんぜんだいせんせかい

そうもく

恒沙塵数なり。大海を硯の水とし、三千大千世界の草木を

ふで

か

つ

きようぎよう

なか

筆としても、書き尽くしがたき経々の中をも、あるいは

み

はか

すい

ほけきよう

さいだいいち

これを見、あるいは計り推するに、法華経は最第一におわ

します。

しかるを、印度等の宗、日域の間に、仏意を窺わざる

ろんじ いんどとう しゅう にちいき かん ぶつ い うかが
にんし おお

論師・人師多くして、あるいは「大日経は法華経に勝れた

だい にちきよう ほけきよう すぐ

り」、ある人々は「法華経は大日経に劣れるのみならず、

けごんぎよう

およ

ひとびと

ほけきよう

ねはんぎよう

華嚴経にも及ばず」、ある人々は「法華経は涅槃経・

はん に やきよう

じん みつきようとう

おと

ひとびと

へんぺん

たが

般若経・深密経等には劣る」、ある人々は「辺々あり。互

しょうれつ

ゆえ

ひと い

き

したが

しょうれつ

いに勝劣ある故に」、ある人云わく「機に随つて勝劣あ

じき

かな

すぐ

かな

おと

ひと い

り。時機に叶えば勝れ、叶わざれば劣る」、ある人云わく

うもん

とくどう

き

くうもん

謗

うもん

褒

「有門より得道すべき機あれば、空門をそしり有門をほむ。

よ

し

もう

余もこれをもつて知るべし」なんと申す。

とき ひとびと なか ほうもん もう 破 ひと

その時の人々の中にこの法門を申しやぶる人なければ、

こくおうとう ふか しん たま でんばたとう きしん

おろかなる国王等、深くこれを信ぜさせ給い、田畠等を寄進

ととう 数 多 ぎ ひさ ふ

して、徒党あまたになりぬ。その義、久しく旧りぬれば、

しょうほう う おも うたが す

ただ「正法なんめり」と打ち思つて、疑うこともなく過ぎ

い まっせ かれ ろんじ にんし ち えかしこ ひとしゆつたい

行くほどに、末世に彼らが論師・人師より智慧賢き人出来

かれ たも ろんじ にんし りゆうぎ いちいち

して、彼らが持つところの論師・人師の立義、一々に、あ

しよえ きようぎよう そうい 様 いちだいしろうぎよう

るいは所依の経々に相違するよう、あるいは一代聖教

しまつ せんじんとう わきま ゆえ もつぱ きようもん せ もう

の始末・浅深等を弁えざる故に専ら経文をもつて責め申

とき おのおの しゅうじゅう がんそ じゃぎたす がた ゆえ ちん かた うしな

す時、各々、宗々の元祖の邪義扶け難き故に、陳じ方を失

い、あるいは疑つて云わく「論師・人師、定めて経論にうたが い ろんじ にんし さだ きょうろん

しようもん

証文ありぬらん。我が智及ばざれば扶けがたし、あるいわ ち およ たす

うたが

い

わ

し

じょうこ

けんてつ

いま

われ

まつだい

は疑つて云わく「我が師は上古の賢哲なり、今、我らは末代

ぐにん

おも

ゆえ

うとく

こうにん

語

得

の愚人なり」なんと思ふ故に、有徳・高人をかたらいえて、

あだ

怨のみなすなり。

よ

じた

へんとう

ろんじ

にんし

しかりといえども、予、自他の偏党をなげすて、論師・人師

りょうけん

さいお

もつぱ

きょうもん

ほけきょう

すぐ

の料簡を閣いて、専ら经文によるに、法華経は勝れて

だいいち

こころえ

はべ

ほけきょう

すぐ

第一におわすと意得て侍るなり。法華経に勝れておわする

おんきよう

もう

ひとしゅつたいそうら

おぼ

御経ありと申す人出来候わば、思しめすべし、「これは

そうじ きようもん み 違 もう ひと わたくし われ

相似の経文を見たがえて申すか。また、人の私に我と

きようもん こと ぶつせつ 寄 そうろう ちえ

経文をつくりて、事を仏説によせて候か。智慧おろかな

もの わきま ぶつせつ べい おぼ

る者、弁えずして、仏説と号する」なんどと思しめすべし。

えのう だんきよう ぜんどう かんねんほうもんぎよう てんじく しんたん にほんこく

慧能が壇経、善導が観念法門経、天竺・震旦・日本国に、

わたくし きよう と じゃし かずおほ ほか わたくし

私に経を説きおける邪師、その数多し。その外、私に

きようもん つく きようもん わたくし ことば くわ ひとびと

経文を作り、経文に私の言を加えなんどせる人々、こ

おほ ぐしや まこと おも

れ多し。しかりといえども、愚者はこれを真と思うなり。

たと てん にちがつ ほしあ もう まなこな

譬えば、天に日月にすぎたる星有りなんど申せば、眼無き

もの おも

者はさもやなんど思わんがごとし。

わ し じょうこ けんでつ なんじ まっだい ぐにん もう
「我が師は上古の賢哲、汝は末代の愚人」なんと申すこ

とをば、愚かなる者はさもやと思うなり。この不審は今に始

まりたるにあらず。陳・隋の代に、智顗法師と申せし小僧

一人侍りき。後には二代の天子の御師、天台智者大師と号し

奉る。この人、始めいやりし時、ただ漢土五百余年の

三蔵・人師を破るのみならず、月氏一千年の論師をも破せ

しかば、南北の智人等、雲のごとく起こり、東西の賢哲等、

星のごとく列なつて、雨のごとく難を下らし、風のごとく

この義を破りしかども、終に論師・人師の偏邪の義を破し

て、天台一宗の正義を立てにき。

にちいき かんむ ぎよう さいちよう もう しょうそうはべ

日域の桓武の御宇に、最澄と申す小僧侍りき。後には

でんぎようだいし ぎよう たてまつ きんめいいらい にひやくよねん もろもろ にんし

伝教大師と号し奉る。欽明已来の二百余年の諸の人師

しよしゆう やぶ はじ しょにん 怒

の諸宗を破りしかば、始めは諸人いかりをなせしかども、

のち いちどう みでし ひとびと なん われ

後には一同に御弟子となりにき。これらの人々の難に、「我

がんそ しえ ろんじ じようこ けんてつ なんじ ぞうまつ

らが元祖は四依の論師、上古の賢哲なり。汝は像末の

ぼんぷ ぐにん なん はべ しょうぞうまつ よ

凡夫・愚人なり」とこそ難じ侍りしか。正像末には依るべ

じつきよう もん よ にん よ もつば

からず、実経の文に依るべきぞ。人には依るべからず、専

どうり よ げどう ほとけ なん い なんじ じようこう

ら道理に依るべきか。外道、仏を難じて云わく「汝は成劫

まつ　じゅうこう　はじ　ぐにん　われ　ほんし　せんだい　ちしや
の末、住劫の始めの愚人なり。我らが本師は先代の智者、

にてんさんせん

もう

つい　くじゅうごしゆ

二天三仙これなり」なんと申せしかども、終に九十五種の

げどう

す

外道とこそ捨てられしか。

にちれん

はっしゆう

かんが

ほっそうしゆう

けごんしゆう

さんろんしゆうとう

日蓮、八宗を勘えたるに、法相宗・華嚴宗・三論宗等

ごんきよう

よ

じつきよう

おな

じつきよう

は、権経に依つて、あるいは実経に同じ、あるいは実経

くだ

ろんじ

にんし

あやま

み

くしや

じようじつ

を下せり。これ論師・人師より誤りぬと見えぬ。俱舎・成実

しさい

うえ

りつしゆう

しょうじようさいげ

しゆう

にんし

は子細ある上、律宗なんどは小乗最下の宗なり。人師よ

ごんだいじよう

じつだいじようきよう

り権大乘・実大乘経になれり。

しんごんしゆう

だいにちきようとう

けごんきようとう

およ

真言宗・大日経等は、いまだ華嚴経等にも及ばず。い

ねはん ほけきようとう およ

かにいわんや、涅槃・法華経等に及ぶべしや。しかるに、

ぜんむいさんぞう けごん ほつけ だいにちきようとう しようれつ はん とき

善無畏三蔵は、華嚴・法華・大日経等の勝劣を判ずる時、

りどうじしよう みようしゃく つく このかた 傲

理同事勝の謬釈を作りしより已来、あるいはおごりをな

ほけきよう けごんぎよう おと

して「法華経は華嚴経にも劣りなん。いかにいわんや

しんごんきよう およ い いん しんごん

真言経に及ぶべしや」、あるいは云わく「印・真言のなき

ほけきよう あらせ い てんだいしゅう

ことは、法華経に諍うべからず」、あるいは云わく「天台宗

そし おお しんごんしゅう すぐ い せけん おも しんごんしゅうすぐ

の祖師、多く真言宗を勝ると云い、世間の思いも真言宗勝

おも にちれん はか ひとおお

れたるなんめりと思えり」。日蓮このことを計るに、人多く

まよ いさい 勘 よしよ しる

迷うことなれば、委細にかんがえたるなり。ほぼ余処に注せ

み

（ハ）ろざし

ひとびと

ぞんしょう

とき

なら

つた

り。見るべし。また 志 あらん人々は、存生の時、習い伝

ひと

おお

思

恐

じせつ

うべし。人の多くおもうにはおそるべからず、また時節の

く ごん

よ

もつぱ

きようもん

どうり

よ

久・近にも依るべからず、専ら経文と道理とに依るべし。

じようどしゆう

どんらん

どうたく

ぜんどう

あやま

おお

おお

ひとびと

浄土宗は曇鸞・道綽・善導より誤り多くして多くの人々

じゃけん

い

にほん

ほうねん

受

と

ひと

を邪見に入れけるを、日本の法然これをうけ取って、人ご

ねんぶつ

しん

てんか

しよしゆう

みなうしな

とに念仏を信ぜしむるのみならず、天下の諸宗を皆失わ

えいざんさんぜん

だいしゆ

なんと

こうふくじ

とうだいじ

はつしゆう

んとするを、叡山二千の大衆・南都の興福寺・東大寺の八宗

塞

ゆえ

だいだい

こくおうちよくせん

くだ

しやうぐんけ

よりこれをせく故に、代々の国王勅宣を下し、将軍家より

みぎようしよ

塞

止

はんじよう

御教書をなしてせけどもとどまらず、いよいよ繁昌して、

かえ しゅじよう

じようこう

ばんみんとう

みなしんぷく

返つて主上・上皇より万民等にいたるまで皆信伏せり。

にちれん

あわのくにとうじよう

かたうみ

いそなか

せんみん

こ

しかるに、日蓮は、安房国東条の片海の石中の賤民が子

いとく

うとく

なんと

なり。威徳なく、有徳のものにあらず。なににつけてか、南都

ほくれい

止

てんし

こが

せいし

かな

ねんぶつ

北嶺のとどめがたき、天子・虎牙の制止に叶わざる念仏を

防

おも

きようもん

ききよう

さだ

てんだい

でんぎよう

ふせぐべきとは思えども、経文を亀鏡と定め、天台・伝教

しなん

て

握

けんちようごねん

ことしぶんえいしちねん

いた

の指南を手ににぎりて、建長五年より今年文永七年に至る

じゅうしちねん

あいだ

せ

にほんこく

ねんぶつ

だいたいとど

まで十七年が間これを責めたるに、日本国の念仏、大体留

お

がんぜん

み

くち

捨

ひとびと

まり了わんぬ。眼前にこれ見えたり。また口にすてぬ人々は

こころ

ねんぶつ

しやうじ

離

どう

あれども、心ばかりは念仏は生死をはなるる道にはあらざ

おも
りけると思う。

ぜんしゅう

禅宗もつてかくのごとし。一をもつて万を知れ。真言等

いち

まん

し

しんごんとう

しよしゅう

あやま

とど

て

握

覚

の諸宗の誤りをだに留めんこと、手ににぎりておぼゆる

とうせい

こうそう

しんごんしとう

ちぎゅうば

なり。いわんや、当世の高僧・真言師等は、その智牛馬に

劣

ほたるび

ひかり

し

て

もおとり、螢火の光にもしかず。ただ死せるものの手に

ゆみや

結

寝言

もの問

て

弓箭をゆいつけ、ねごとするものに物をとうがごとし。手に

いん

むす

くち

しんごん

じゆ

しんちゅう

ぎり

わきま

印を結び、口に真言は誦すれども、その心中には義理を弁

けつく

まんしん

やま

たか

よくしん

うみ

うることなし。結句、慢心は山のごとく高く、欲心は海よ

ふか

みな

みずか

きようろん

しやうれつ

まよ

ことお

りも深し。これは皆、自ら経論の勝劣に迷うより事起こ

り、祖師の誤りをたださざるによるなり。

せん

ちしや はちまんほうぞう なら

じゅうにぶきよう

詮ずるところは、智者は八万法蔵をも習うべし、十二部經

がく

まつだいじよくあくせ ぐにん

ねんぶつとう なんぎよう いぎよう

をも学すべし。末代濁悪世の愚人は、念仏等の難行・易行

とう なげう

いつこう ほけきよう だいもく なんみようほうれんげきよう とな

等をば抛って、一向に法華經の題目を南無妙法蓮華經と唱

たも

にちりん とうほう そら い

たま なんぶ そら

え給うべし。日輪、東方の空に出でさせ給えば、南浮の空、

みなあき

だいこう そな たま ゆえ ほたるび

こくど

皆明らかなり。大光を備え給える故なり。萤火はいまだ国土

て

ほうしゆ かいちゆう たも

ばんぶつみな降

を照らさず、宝珠は懷中に持ちぬれば万物皆ふらさずとい

がしやく たから

ねんぶつとう ほけきよう だいもく

うことなし。瓦石は財をふらさず。念仏等は、法華經の題目

たい

がしやく ほうしゆ ほたるび につこう

われ

に対すれば、瓦石と宝珠と、萤火と日光とのごとし。我ら

くら まなこ

ほたるび

ひかり

え

もの

いろ

わきま

が味き眼をもつて、螢火の光を得て物の色を弁うべしや。

ぼんぷ

かな

ほう

ねんぶつ

しんごんとう

しょうじよう

かたがた凡夫の叶いがたき法は、念仏・真言等の小乗・
ごんきよう

権経なり。

わ

し

しやかによらい

いちだいしょうぎよう

ないしはちまんほうぞう

また、我が師・釈迦如来は、一代聖教、乃至八万法蔵の

せつしや

しやば

むぶつ

よ

さいせん

い

たま

説者なり。この娑婆、無仏の世の最先に出でさせ給いて、

いっさいしゅじよう

がんもく

ひら

たも

みほとけ

とうざいじつぽう

もろもろ

ぶつ

一切衆生の眼目を開き給う御仏なり。東西十方の諸の仏

ぼさつ

みな

ほとけ

おし

たと

こうていいぜん

菩薩も、皆この仏の教えなるべし。譬えば、皇帝已前は、

ひと ちち

ちくしろう

ぎようおういぜん

しき

わきま

人、父をしらずして畜生のごとし。堯王已前は、四季を弁

ぎゆうば

おろ

おな

ほとけよ

い

たま

えず、牛馬の癡かなるに同じかりき。仏世に出でさせ給わ

びく びくに にしゅ

なんによににん

ざりしには、比丘・比丘尼の二衆もなく、ただ男女二人に

そうら

いま

びく

びくに

しんごんしとうだいにちによらい

ごほんぞん

て候いき。今、比丘・比丘尼の真言師等大日如来を御本尊

さだ

しやかによらい

くだ

ねんぶつしやとう

あみだぶつ

いつこう

たも

と定めて釈迦如来を下し、念仏者等が阿弥陀仏を一向に持

しやかによらい

なげう

きようしゅしやくそん

びく

びくに

つて釈迦如来を抛ちたるも、教主釈尊の比丘・比丘尼な

がんそ

あやま

つた

きた

り。元祖が誤りを伝え来るなるべし。

しやかによらい

みつ

ゆえ

たぶつ

たま

この釈迦如来は、三つの故ましまして、他仏にかわらせ給

しやばせかい

いつさいしゅじよう

うえん

ほとけ

たも

いて娑婆世界の一切衆生の有縁の仏となり給う。

いち

しやばせかい

いつさいしゅじよう

せそん

一には、この娑婆世界の一切衆生の世尊にておわします。

あみだぶつ

くに

だいおう

しやかぶつ

たと

わ

阿弥陀仏はこの国の大王にはあらず。釈迦仏は、譬えば我が

くに しゅじょう

くに だいおう うやま のち たこく

国の主上のごとし。まずこの国の大王を敬って、後に他国

おう うやま てんしやうだいじん しゅはちまんぐうとう わ くに ほんしゅ

の王をば敬うべし。天照太神・正八幡宮等は我が国の本主

しやつけ のち かみ あらわ たも かみ ひと

なり。迹化の後、神と顕れさせ給う。この神にそむく人、

くに しゅ てんしやうだいじん かがみ

この国の主となるべからず。されば、天照太神をば鏡に

映 たてまつ ないしどころ ごう はちまんだいぼさつ ちよくしあ もの

うつし奉りて内侍所と号す。八幡大菩薩に勅使有つて物

もう 合 たま だいかくせそん われ そんしゅ

申しあわせ給いき。大覚世尊は我らが尊主なり、まず

ごほんぞん さだ

御本尊と定むべし。

に しやかによらい しやばせかい いっさいしゅじょう ふぼ

二には、釈迦如来は娑婆世界の一切衆生の父母なり。ま

わ ふぼ こう のち たにん ふぼ およ

ず我が父母を孝し、後に他人の父母には及ぼすべし。例せ

れい

しゅう ぶおう ちち かたち もくぞう つく くるま いくさ

ば、周の武王は父の形を木像に造つて、車にのせて戦の

たいしよう さだ てんかん こうむ いん ちゅうおう 打 しゅんおう うち

大将と定めて天感を蒙り、殷の紂王をうつ。舜王は父の

まなこ めしい 歎 なみだ て 拭

眼の盲たるをなげきて涙をながし、手をもつてのよいし

もと まなこ 開 ほとけ

かば、本のごとく眼あきにけり。この仏もまたかくのご

われ しゅじょう まなこ かいぶつちけん ひら たま

とし。我ら衆生の眼をば開仏知見とは開き給いしか。い

たぶつ ひら たま

まだ他仏は開き給わず。

さん ほとけ しゃばせかい いっさいしゅじょう ほんし

三には、この仏は娑婆世界の一切衆生の本師なり。こ

ほとけ げんごうだいく にんじゅひやくさい とき ちゅうてんじく じようぼんだいおう

の仏は、賢劫第九・人寿百歳の時、中天竺の浄飯大王の

みこ じゅうく しゅつけ さんじゅう じようどう ごじゅうよねん

御子、十九にして出家し、三十にして成道し、五十余年が

あいだいちだいしようぎよう

と

はちじゅう

ごにゆうめつ

しやり

とど

間一代聖教を説き、八十にして御入滅、舍利を留めて

いっさいしゅじよう

しようぞうまつ

すく

たも

あみだによらい

やくしぶつ

だいにち

一切衆生を正像末に救い給う。阿弥陀如来・薬師仏・大日

とう

たど

ほとけ

せかい

せそん

等は、他土の仏にして、この世界の世尊にてはましまさず。

しゃばせかい

じつぼうせかい

なか

さいげ

ところ

たと

この娑婆世界は、十方世界の中の最下の処、譬えば、こ

こくど

なか

こくもん

じつぼうせかい

なか

じゅうあくごぎやく

の国土の中の獄門のごとし。十方世界の中の十悪五逆・

ひぼうしようほう

じゅうざい

じゃくざい

もの

しよぶつによらいひんずい

たま

誹謗正法の重罪・逆罪の者を諸仏如来擯出し給いしを、

しゃかによらい

ど

たも

さんあく

むけんだいじよう

釈迦如来、この土にあつめ給う。三悪ならびに無間大城に

お

く

償

にんちゆう

てんじよう

う

堕ちて、その苦をつぐのいて、人中・天上には生まれた

つみ

よざん

しようほう

ぼう

れども、その罪の余残ありて、ややもすれば正法を謗じ

ちしや の つみ

智者を罵り罪つくりやすし。

れい しんじ あらかん

例せば、身子は阿羅漢なれど

しんに 気 色

ひつりよう けんじ だん

まんしん

も瞋恚のけしきあり。畢陵は見思を断ぜしかども慢心の

かたち見 なんだ いんよく

だん によにん まじ こころ

ぼんのう

形みゆ。難陀は姪欲を断じても女人に交わる心あり。煩惱

だん よざん

ぼんぷ

を断じたれども余残あり。いかにいわんや凡夫においてを

しやかによらい みな のうにん な

ど

や。されば、釈迦如来の御名をば能忍と名づけて、この土に

い たも いっさいしゅじよう ひぼう

能 しの たも ゆえ

入り給うに一切衆生の誹謗をとがめずよく忍び給う故な

ひじゆつ たぶつ 欠 たま

り。これらの秘術は他仏のかけ給えるところなり。

あみだぶつとう しよぶつせそん ひがん 発 たま こころ

阿弥陀仏等の諸仏世尊、悲願をおこさせ給いて、心には

恥 思 かえ かい 通

はじをおぼしめして、還つてこの界にかよい、四十八願・

しじゆうはちがん

じゅうにだいがん

十二大願おなんどは起たもこさせ給かんぜおんとううなるべし。観世音等の他土たど

ぼさつ

の菩薩も、またまたかくのごとし。仏には、常平等の時じようびようどう

いっさいしよぶつ

さべつ

じようさべつ

とき

おのおの

じつぼう

は、一切諸仏は差別なけれども、常差別の時は、各々に十方

せかい

ど

占

うえん

むえん

わ

たも

だいつうちしよぶつ

世界に土をしめて、有縁・無縁を分かち給う。大通智勝仏の

じゅうろくおうじ

じつぼう

ど

いちいち

わ

でし

すく

たも

十六王子、十方に土をしめて、一々に我が弟子を救い給う。

なか

しやかによらい

ど

あ

たも

われ

しゅじよう

その中に、釈迦如来は、この土に当たり給う。我ら衆生も

しよう

しやばせかい

う

しやかによらい

きようけ

また生を娑婆世界に受けぬ。いかにも釈迦如来の教化をば

離

はなるべからず。しかりといえども、人皆これを知らず。委

ひとみな

し

くわ

たず

明

われいちにん

よ

くど

しく尋ねあきらめば、「ただ我一人のみ、能く救護をなす」

もう

しやかによらい

みて

はな

と申して、釈迦如来の御手を離るべからず。しかれば、こ

ど

いっさいしゅじよう

しやうじ

いと

ごほんぞん

あが

思

の土の一切衆生、生死を厭い御本尊を崇めんとおぼしめさ

かなら

しやくそん

もくえ

ぞう

あらわ

ごほんぞん

さだ

ば、必ずまず釈尊を木画の像に顕して御本尊と定めさせ

たま

のち

ちから

みだとう

たぶつ

およ

給いて、その後、力おわしまさば、弥陀等の他仏にも及ぶ

べし。

とうせい

しやうぎよう

ど

ひとびと

ほとけ

造

しかるを、当世、聖行なきこの土の人々の仏をつくり

画

たも

たぶつ

先

ほとけ

ごほんい

かかせ給うに、まず他仏をさきとするは、その仏の御本意

しやかによらい

ごほんい

かな

うえ

せけん

れいぎ

にも釈迦如来の御本意にも叶うべからざる上、世間の礼儀

外

そうろう

うでんだいおう

しやくせんだん

たぶつ

にもはずれて候。されば、優填大王の赤梅檀いまだ他仏

刻

たま

せんどうおう

えぞう

しゃかによらい

をばきざませ給わず、仙道王の画像も釈迦如来なり。

しよだいじようきよう

ひとびと

わ

しよえ

きようぎよう

しかるを、諸大乘経による人々、我が所依の経々を

しよきよう

すぐ

おも

ゆえ

きようしゆしやくそん

つぎ

様

たも

諸経に勝れたりと思う故に、教主釈尊をば次ざまにし給

いっさい

しんごんし

だいにちきよう

しよきよう

すぐ

おも

ゆえ

う。一切の真言師は、大日経は諸経に勝れたりと思う故に、

きよう

せん

だいにちによらい

われ

うえん

ほとけ

おも

この経に詮とする大日如来を我らが有縁の仏と思い、

ねんぶつしやとう

かんぎようとう

しん

ゆえ

あみだぶつ

しやばうえん

念仏者等は、観経等を信ずる故に、阿弥陀仏を娑婆有縁の

ほとけ

おも

とうせい

ぜんどう

ほうねんとう

じゃぎ

しようぎ

おも

仏と思う。当世は、ことに善導・法然等が邪義を正義と思

じようど

さんぶきよう

しなん

ゆえ

じゆうつく

てら

はち

く

つて、浄土の三部経を指南とする故に、十造る寺は八・九

あみだぶつ

ほんぞん

ざいけ

しゆつけ

いっけ

じっけ

ひやつけ

せんけ

は阿弥陀仏を本尊とす。在家・出家、一家・十家・百家・千家

じぶつどう

ほとけ

あみだ

ほか

もくえ

にいたるまで、持仏堂の仏は阿弥陀なり。その外、木画の

ぞう

いつけ

せんぶつ

まんぶつ

おおむね

あみだぶつ

像、一家に千仏・万仏まします大旨は阿弥陀仏なり。しか

とうせい

ちしや

ひとびと

み

禍

るに、当世の智者とおぼしき人々、これを見てわざわいと

おも

わ　　こころ

あいかな　　ゆえ

しょうみ

さんたん

こころ

は思わずして、我が意に相叶う故に、ただ称美・讃歎の心

いっこうあくにん

いんが

どうり

わきま

のみあり。ただ一向悪人にして、因果の道理をも弁えず

いちぶつ

たも

もの

かえ

とが

辺

一仏をも持たざる者は、還つて失なきへんもありぬべし。

われ

ふぼ

せそん

しゆししん

さんとく

そな

いっさい

我らが父母たる世尊は、主師親の三徳を備えて、一切の

ほとけ

ひんずい

われ

われいちにん

よ

くご

仏に擯出せられたる我らを、「ただ我一人のみ、能く救護を

励

たも

おん

たいかい

ふか

おん

なす」とはげませ給う。その恩、大海よりも深し。その恩、

だいち

あつ

おん

こくう

ひろ

ふた

まなこ

抜

大地よりも厚し。その恩、虚空よりも広し。二つの眼をぬ

ぶつぜん

そら

ほし

かずそな

み

かわ

は

ひやくせんまん

いて仏前に空の星の数備うとも、身の皮を剥いで百千万

てんじよう

張

なみだ

あか

みず

せんまんおくこうぶつぜん

はな

天井にはるとも、涙を閼伽の水として千万億劫仏前に花

そな

み

にくけつ

むりようこうぶつぜん

やま

つ

たいかい

を備うとも、身の肉血を無量劫仏前に山のごとく積み大海

たた

ほとけ

いちぶん

ごおん

ほう

つ

のごとく湛うとも、この仏の一分の御恩を報じ尽くしがた

し。

とうせい

びやつけん

かくしやとう

はちまんほうぞう

きわ

しかるを、当世の僻見の学者等、たとい八万法蔵を極め、

じゅうにぶきよう

そら

だいししよう

かいほん

かた

たも

たも

ちしや

十二部経を諳んじ、大小の戒品を堅く持ち給う智者なりと

どうり

そむ

あくどう

まぬか

おぼ

も、この道理に背かば悪道を免るべからずと思しめすべし。

れい

ぜんむいさんぞう

しんこんしゅう

がんそ

うじょうなこく

だいおう

例せば、善無畏三蔵は、真言宗の元祖、烏菴奈国の大王・

ぶつしゅおう

たいし

きょうしゅしやくそん

じゅうく

しゅつけ

たま

仏手王の太子なり。教主釈尊は十九にして出家し給いき。

さんぞう

じゅうさん

くらい

す

がつししちじゅうかこく

くまんり

この三蔵は十三にして位を捨て、月氏七十箇国、九万里を

ある

めぐ

しよきよう

しよろん

しよしゅう

なら

つた

ほくてんじく

こんぞくおう

歩き回つて、諸経・諸論・諸宗を習い伝え、北天竺の金粟王

とう

もと

てん

あお

きしゅう

いた

たま

こくう

なか

の塔の下にして天に仰ぎ祈請を致し給えるに、虚空の中に

だいんちによらい

ちゅうおう

たいどうかい

まんだらあらわ

たも

大日如来を中央として胎蔵界の曼荼羅顕れさせ給う。

じひ

あま

しょうほう

へんど

ひろ

おぼ

かんど

慈悲の余り、この正法を辺土に弘めんと思しめして漢土に

い

たま

げんそうこうてい

ひほう

さず

たてまつ

かんばつ

とき

あめ

いの

入り給い、玄宗皇帝に秘法を授け奉り、旱魃の時、雨の祈

たま

みっか

うち

てん

あめ

りをし給いしかば、三日が内に天より雨ふりしなり。この

さんぞう

せんにひやくよそん

しゅじ

そんぎよう

さんまや

いちじ

三蔵は、千二百余尊の種子・尊形・三摩耶、一事もくもり

とうせい

とうじとう

いっさい

しんごんしゅう

いちにん

みでし

なし。当世の東寺等の一切の真言宗、一人もこの御弟子に

あらざるはなし。

さんぞう

いちじ

とんし

あまた

ごくそつきた

しかるに、この三蔵、一時、頓死ありき。数多の獄卒来つ

てつじようしち

筋

か

えんまおうぐう

いた

こと

て鉄縄七すじ懸けたてまつり、閻魔王宮に至る。この事、

だいいち

ふしん

つみ

せ

あ

たま

第一の不審なり。いかなる罪あつて、この責めに値い給い

こんじよう

じゅうあく

あ

ごぎやくざい

つく

けるやらん。今生は十悪は有りもやすらん、五逆罪は造ら

かこ

たず

たいこく

おう

たも

かんが

ず。過去を尋ねれば、大国の王となり給うことを勘うるに、

じゅうぜんかい

かた

たも

ごひやく

ぶつだ

つか

たも

なん

つみ

十善戒を堅く持ち、五百の仏陀に仕え給うなり。何の罪か

うえ　じゅうさん

くらい　す

しゅつけ　たま

あらん。その上、十三にして位を捨てて出家し給いき。

えんぶだいいち　ぼだいいしん

かこ　げんざい　きようじゅう　つみ　めつ

閻浮第一の菩提心なるべし。過去・現在の軽重の罪も滅す

うえ　がっし　るふ

きようろん　しよしゅう　なら

らん。その上、月氏に流布するところの経論・諸宗を習い

きわ　たま　なん　つみ　き

しんごんみつきよう　ほか

極め給いしなり。何の罪か消えざらん。また真言密教は他

こと　ほう　いちいん　いちしんごん

て　むす　くち

に異なる法なるべし。一印・一真言なれども、手に結び口に

じゆ　さんぜ　じゅうざい　めつ

むりよう

誦すれば、三世の重罪も滅せずということなし。無量

くていこう　あいだつく

もろもろ　ざいしろう　まんだら　み

俱低劫の間作るところの衆の罪障も、この曼荼羅を見

いちじ　みなしようめつ　もう　そつら

れば、一時に皆消滅すところぞ申し候え。いわんや、この

さんぞう　せんにひやくよそん　いん　しんごん　そら　う　そくしんじようぶつ

三蔵は、千二百余尊の印・真言を諳に浮かべ、即身成仏の

かんどうかがみ

か

りようぶかんじよう

おんとき

だいにちかくおう

たま

観道鏡に懸かり、両部灌頂の御時、大日覚王となり給い

えんま

せ

あず

たま

き。いかにして閻魔の責めに預かり給いけるやらん。

にちれん

けんみつにどう

なか

すぐ

たま

われ

やすやす

しょうじ

日蓮は、顕密二道の中に勝れさせ給いて我ら易々と生死

はな

おし

い

おも

そうら

しんごん

ひきよう

を離るべき教えに入らんといい候いて、真言の秘教を

粗々なら

たず

かんが

いちにん

こた

あらあら習い、このことを尋ね勘うるに、一人として答え

ひと

ひとあくどう

まぬか

とうせい

いっさい

しんごん

をする人なし。この人悪道を免れずば、当世の一切の真言

いちいん

いちしんごん

どうぞく

さんあくどう

つみ

まぬか

ならびに一印・一真言の道俗、三悪道の罪を免るべきや。

にちれん

くわ

かんが

ふた

とがあ

えんまおう

日蓮このことを委しく勘うるに、二つの失有つて閻魔王

せ

あず

たま

いち

だいにちきよう

ほけきよう

おと

の責めに預かり給えり。一には、大日経は法華経に劣るの

ねはんぎよう けごんぎよう はんにやきようとう およ きよう

みにあらず、涅槃経・華嚴経・般若経等にも及ばざる経に

そうろう ほけきよう すぐ ほうぼう とが に

て候を、法華経に勝れたりとする謗法の失なり。二には、

だいにちによらい しゃくそん ふんじん だいにちによらい きようしゆ

大日如来は釈尊の分身なり。しかるを大日如来は教主

しゃくそん すぐ おも びやつけん ほうぼう つみ

釈尊に勝れたりと思ひし僻見なり。この謗法の罪は、

むりようこう あいだせんにひやくよそん ほう ぎよう あくどう まぬか

無量劫の間千二百余尊の法を行ずとも、惡道を免るべか

さんどう とがまぬか がた ゆえ しょそん いん しんごん

らず。この三蔵、この失免れ難き故に、諸尊の印・真言を

な かな ほけきようだいに ひゆほん いま

作せども叶わざりしかば、法華経第二の譬喩品の「今この

さんがい みな わ う なか しゆじよう

三界は、皆これ我が有なり。その中の衆生は、ことごとく

わ こ いま しょ もろもろ げんなんおお

これ吾が子なり。しかるに今この処は、諸の患難多し。

ただ我一人のみ、能く救護をなす」の文を唱えて、鉄の縄

まぬか

たま

を免れさせ給いき。

ぜんむい いご

しんごんしとう

だいにちきよう

いつさいきよう

しかるに、善無畏已後の真言師等は、「大日経は一切経

すぐ

ほけきよう

ちようか

に勝るるのみにあらず、法華経に超過せり」、あるいは

ほけきよう

けごんぎよう

おと

もう

ひと

「法華経は華嚴経にも劣る」なんと申す人もあり。これら

ひと こと

ほうぼう

つみ

おな

ぜんむい

は、人は異なれども、その謗法の罪は同じきか。また、善無畏

さんぞう

ほけきよう

だいにちきよう

だいじ

じんり

どう

三蔵は、法華経と大日経と大事とすべしと深理をば同ぜさ

たま

いん

しんごん

ほけきよう

だいにちきよう

おと

せ給いしかども、印と真言とは法華経は大日経に劣りける

思

びやつけん

いご

しんごんしとう

だいじ

とおぼせし僻見ばかりなり。その已後の真言師等は、大事

の理をも法華經は劣れりと思えり。印・真言はまた申すに及

ほうぼう つみはる

嵩

えんま せ

だごく く

ばず。謗法の罪遙かにかさみたり。閻魔の責めにて墮獄の苦

の み

ただ

あび ほのお

まね

を延ぶべしとも見えず。直ちに阿鼻の炎をや招くらん。

だいにちきよう

もと

いちねんさんぜん

じんり

り

ほけきよう

大日經には、本、一念三千の深理なし。この理は法華經

かぎ

ぜんむいさんぞう

てんだいだいし

ほけきよう

じんり

よい

に限るべし。善無畏三藏、天台大師の法華經の深理を読み出

たま

ぬす

と

だいにちきよう

い

ほけきよう

しようごん

ださせ給いしを、盗み取つて大日經に入れ、法華經の莊嚴

と

そうろうだいにちきよう

いん

しんごん

か

きよう

とくぶん

として説かれて候 大日經の印・真言を、彼の經の得分と

おも

り

おな

もう

びやつけん

しんごん

いんげい

とくぶん

思えり。理も同じと申すは僻見なり。真言・印契を得分と

おも

じゃけん

たと

ひと

げにん

ろっこん

しゆ

もの

思うも邪見なり。譬えば、人の下人の六根は主の物なるべ

し。しかるを、わ たから おも ゆえ おお とが い きた我が財と思う故に、多くの失出で来る。こ

たと

しよきよう さと

おと きよう と ほうもん

すぐ

の譬えをもつて諸経を解るべし。劣る経に説く法門は、勝

きよう とくぶん な

れたる経の得分と成るべきなり。

にちれん あわのくにとうじようのごうきよすみさん じゆうにん

しかるを、日蓮は安房国東条郷清澄山の住人なり。

ようしよう とき こくうぞうぼさつ がん た い にほんだいいち

幼少の時より虚空蔵菩薩に願を立てて云わく「日本第一の

ちしや たま うんぬん こくうぞうぼさつ がんぜん こうそう

智者となし給え」と云々。虚空蔵菩薩、眼前に高僧となら

たま みようじよう ちえ ほうしゆ さず たま

せ給いて、明星のごとくなる智慧の宝珠を授けさせ給い

験 にほんこく はつしゅう ぜんしゅう ねんぶつしゅう

き。そのしるしにや、日本国の八宗ならびに禅宗・念佛宗

とう たいこう うかが はべ こと けんちようごねん ころ いま

等の大綱、ほぼ伺い侍りぬ。殊には建長五年の比より今

ぶんえいしちねん

いた

じゅうろく

しちねん

あいだ

ぜんしゅう

文永七年に至るまで、この十六・七年の間、禅宗と

ねんぶつしゅう

なん

ゆえ

ぜんしゅう

ねんぶつしゅう

がくしゃ

はち

念仏宗とを難ずる故に、禅宗・念仏宗の学者、蜂のごと

お

くも

あつ

詰

いちごんにごん

く起こり、雲のごとく集まる。これをつむること、一言二言

す

けつく

てんだい

しんごんとう

がくしゃ

じしゅう

はいりゅう

なら

には過ぎず。結句は天台・真言等の学者、自宗の廃立を習

うしな

わ

こころ

たしゅう

どう

ざいけ

しん

い失って、我が心と他宗に同じ、在家の信をなせること

か

じゃけん

しゅう

たす

てんだい

しんごん

なれば、彼の邪見の宗を扶けんがために「天台・真言は

ねんぶつしゅう

ぜんしゅう

ひと

りようけん

にちれん

は

念仏宗・禅宗に等し」と料簡しなして、日蓮を破するな

にちれん

は

われ

てんだい

しんごんとう

り。これは、日蓮を破するようなれども、我と天台・真言等

うしな

もの

よ

よ

は

を失う者なるべし。能く能く恥ずべきことなり。この

しよきよう　しよろん　しよしゆう　とが　わきま

諸経・諸論・諸宗の失を弁うることは、虚空蔵菩薩の

ごりしろう　ほんし　どうぜんのごぼう　ごおん

御利生、本師・道善御房の御恩なるべし。

かめ　おん　ほう　じんりん

亀魚すら恩を報ずることあり。いかにいわんや人倫をや。

おん　ほう　きよすみさん　ぶつぼう　ひろ

この恩を報ぜんがために、清澄山において仏法を弘め

どうぜんのごぼう　みちび　たてまつ　ほつ　ひと　ぐち

道善御房を導き奉らんと欲す。しかるに、この人、愚癡

うえ　ねんぶつしや　さんあくどう　まぬか　み

におわする上、念仏者なり。三悪道を免るべしとも見えす。

にちれん　きようくん　もち　ひと

しかもまた、日蓮が教訓を用うべき人にあらず。しかれど

ぶんえいがんねんじゅういちがつじゅうよつか　さいじようはなぶさ　そうぼう　げんざん

も、文永元年十一月十四日、西条華房の僧坊にして見参に

い　とき　か　ひと　われち　え　しろうよう　のぞ

入りし時、彼の人云わく「我智慧なければ請用の望みもな

としお

綵

ねんぶつ

めいそう

た

せけん

し。年老いていらえなければ、念仏の名僧をも立てず。世間

ひろ

なむあみだぶつ

もう

に弘まることなれば、ただ南無阿弥陀仏と申すばかりなり。

わ

こころ

お

こと

えんあ

あみだぶつ

また、我が心より起こらざれども、事の縁有つて阿弥陀仏

ごたい

つく

たてまつ

かこ

しゆくじゅう

を五体まで作り奉る。これまた過去の宿習なるべし。

とが

じごく

お

とううんぬん

この科によつて地獄に墮つべきや」等云々。

とき

にちれん

こころ

おも

べつ

なかたが

その時に、日蓮、意に念わく「別して中違いまいらす

とうじようのさえもんのにゆうどうれんち

こと

ことなけれども、東条左衛門入道蓮智が事によつて、こ

じゅうよねん

あいだ

みたてまつ

なかふわ

の十余年の間は見奉らず。ただし中不和なるがごとし。

おんびん

ぎ

そん

もう

れいぎ

おも

穩便の義を存し、おだやかに申すことこそ礼儀なれ」とは思

しょうじかい　なら　ろうしようふじよう　に　どげんざん

いしかども、「生死界の習い、老少不定なり。また二度見参

かた　ひと　あに　どうぎぼうぎしろう　ひと　む

のこと難かるべし。この人の兄・道義房義尚、この人に向か

むけんじごく　お　ひと　もう　あ　りんじゅうおも

つて無間地獄に墮つべき人と申して有りしが、臨終思うよ

ひと

うにもましまさざりけるやらん。この人もまたしかるべし」

あわ　おも　ゆえ　おも　き　つよづよ　もう

と哀れに思いし故に、思い切つて強々に申したりき。

あみだぶつ　ごたいつく　たま　ご　ど　むけんじごく　お　たま

「阿弥陀仏を五体作り給えるは、五度無間地獄に墮ち給う

ゆえ　しょうじきしやほうべん　ほけきよう　しやかによらい　われ

べし。その故は、正直捨方便の法華経に『釈迦如来は我ら

しんぷ　あみだぶつ　はくふ　と　たも　わ　はくふ　ごたい

が親父、阿弥陀仏は伯父』と説かせ給う。我が伯父をば五体

つく　くよう　たま　しんぷ　いったい　つく　たま

まで作り供養せさせ給いて、親父をば一体も造り給わざり

けるは、あに不孝の人にあらずや。中々、山人・海人なん

とうぎい

いちぜん

しゆ

もの

かえ

つみあさ

もの

どが、東西をしらず一善をも修せざる者は、還つて罪浅き者

とうせい

どうしんじゃ

ごせ

ねが

ほけきよう

しゃかぶつ

なるべし。当世の道心者が後世を願うとも、法華経・釈迦仏

うす

あみだぶつ

ねんぶつ

ねんねん

す

もう

をば打ち捨てて、阿弥陀仏・念仏などを念々に捨て申さ

うみ

ぜんにん

ざるは、いがあるべかるらん。打ち見るところは善人と

み

おや

す

たにん

とが

まぬか

は見えたれども、親を捨てて他人につく失、免るべしとは

み

いっこうあくにん

ぶつぼう

き

しゃかぶつ

す

見えず。一向悪人は、いまだ仏法に帰せず、釈迦仏を捨て

たてまつ

とが

み

えんあ

しん

へん

あ

奉る失も見えず、縁有つて信ずる辺もや有らんずらん。

ぜんどう

ほうねん

とうせい

がくしやとう

じやぎ

つ

あみだぶつ

善導・法然ならびに当世の学者等が邪義に就いて、阿弥陀仏

ほんぞん

いつこう

ねんぶつ

もう

ひとびと

たしようにうごう

経

を本尊として一向に念仏を申す人々は、多生曠劫をふると

じゃけん

ひるがえ

しゃかぶつ

ほけきよう

き

み

も、この邪見を翻して釈迦仏・法華経に帰すべしとは見え

そうりんさいご

ねはんぎよう

じゆうあくごぎやく

す

ず。されば、双林最後の涅槃経に十悪五逆よりも過ぎてお

い

たも

ほうぼう

せんだい

もう

そろしきものをくださせ給うに、『謗法・闡提と申して、

にひやくごじっかい

たも

さんねいっばつ

み

まと

ちしや

なか

二百五十戒を持ち三衣一鉢を身に纏える智者どもの中にこ

あ

み はべ

もう

そうら

そ有るべし』と見え侍れ」と、こまごまと申して候いしか

ひと

心得

おも

ば、この人もこころえずげに思っておわしき。

ぼうざ

ひとびと

心得

思

傍座の人々も、こころえずげにおもわれしかども、その後

のち

うけたまわ

ほけきよう

たも

よしうけたまわ

承りしに、法華経を持たるるの由承りしかば、「この

ひとじゃけん ひるがえ たも ぜんにん な たま よろこ おも
人邪見を 翻し給うか。善人に成り給いぬ」と悦び思
そうろう

候 ところ、またこの釈迦仏を造らせ給うこと、申すば

かりなし。当座には強げなる様にありしかども、法華經の文
とうざ つよ よう ほけきよう もん

のままに説き候いしかば、こうおれさせ給えり。「忠言耳
と そうら 折 たま ちゆうげんみみ

に逆らい、良薬口に苦し」と申すことは、これなり。
さか ろうやくくち にが もう

今既に、日蓮、師の恩を報ず。定めて仏神、納受し給わ
いますで にちれん し おん ほう さだ ぶっしん のうじゆ たま

んか。各々この由を道善房に申し聞かせ給うべし。
おのおの よし どうぜんぼう もう き たも

たとい強言なれども、人をたすくれば実語・軟語なるべし。
じつご なんご

たとい軟語なれども、人を損ずるは妄語・強言なり。当世の
なんご ひと そん もうご ごうごん とうせい

がくしようとう

ほうもん

なんご

じつご

ひとびと

おほ

学匠等の法門は、軟語・実語と人々は思しめしたれども、

みな ごうごん

もうご

ほとけ

ほんい

ほけきよう

そむ

ゆえ

皆、強言・妄語なり。仏の本意たる法華経に背く故なるべ

にちれん

ねんぶつもう

もの

むけんじごく

お

ぜんしゆう

し。日蓮が「念仏申す者は無間地獄に墮つべし。禅宗・

しんごんしゆう

あやま

しゆう

もう

そうろう

ごうごん

真言宗もまた謬りの宗なり」なんと申し候は、強言と

おほ

じつご

なんご

れい

どうぜんのごぼう

は思しめすとも、実語・軟語なるべし。例せば、この道善御房

ほけきよう

むか

しゃかぶつ

つく

たも

にちれん

ごうごん

の法華経を迎え釈迦仏を造らせ給うことは、日蓮が強言よ

お

り起こる。

にほんこく

いつさいしゆじよう

とうせい

日本国の一切衆生も、またまたかくのごとし。当世、こ

じゆうよねん いぜん

いつこうねんぶつしや

そうら

じゆうにん

いち

ににん

の十余年已前は一向念仏者にて候いしが、十人が一・二人

いっこう なんみようほうれんげきよう とな に さんにな りようほう

は一向に南無妙法蓮華經と唱え、二・三人は両方になり、

いっこうねんぶつも うたが ゆえ しんちゆう ほけきよう

また一向念仏申す人も、疑いをなす故に、心中に法華經を

しん しゃかぶつ か つく たてまつ にちれん ぎこうこん

信じ、また釈迦仏を書き造り奉る。これまた日蓮が強言よ

お たと せんだん いらん しょう れんげ どころ い

り起こる。譬えば、梅檀は伊蘭より生じ、蓮華は泥より出

ねんぶつ むけんじごく お もう

でたり。しかるに、「念仏は無間地獄に墮つる」と申せば、

とうせいぎゆうば ちしや にちれん ほうもん

当世牛馬のごとくなる智者どもが、日蓮が法門をかりそめに

そし ふんけん ししおう 吠 ちえん たいしやく わら に

も毀るは、糞犬が師子王をほえ、癡猿が帝釈を笑うに似た

り。

ぶんえいしちねん にちれん かおう

文永七年 日蓮 花押

義浄房・浄顕房

ぎじょうぼう

じょうけんぼう